

心奥探訪

〜自らの想いと向き合い続けた男の「身体からの声」〜

2024年7月末。

まとわりつくような暑さが、これから本格的になるとしている正午ごろ。扉を開けると10人ほどがテーブルを囲んで談笑している。

「来てくれて嬉しいです。」

中心にいた青年が太陽のように明るい笑顔でこちらに近づく。

外の暑さを忘れるほどに彼の纏う雰囲気は人懐っこく、爽やかだ。

そんな彼を囲み、彼の生誕を祝うため、続々と人が集まってくる。

「おめでとう」と「ありがとう」

ありふれた、けれどとても特別な言葉がここには溢れている。

一年の節目を迎え、彼は今―何を想うのか？

そこには笑顔の裏に込められた、まっすぐな想いが輝いていた。

小学1年の頃から始めたサッカー。

そして彼を取り巻く友人たち。

小学4年生では副会長をしたりとクラスの中心にいたという彼の日常。

そんな彼に大きな転機が訪れたのは、6年生のことだった。

「寝たフリして、泣いてました」

仲良しグループのリーダーから呼び出され、一方的にケンカを申し込まれたのだ。

理由もわからず、わけもわからないまま始まったケンカはエスカレートし、

取り巻きの友人たちも彼にボールをぶつけるなど、結果的に8〜9人による集団リンチとなった。

ケンカの理由はリーダーが好きだった子が彼のことを好きだったという、

ごくごくありふれた恋模様らしかった。

しかし、何よりも彼がショックを受けたのは、昨日まで仲の良かった友人たちに裏切られたこと。

子供の頃から知らない子とも遊ぶくらい、人が好きな彼。

それ以降、人と関わるのが怖くなり心を閉ざしたという。

発言も行動も目立たないように意識し、人との距離を取ろうとした。

しかし、元来楽しいことをみんなと楽しみたい彼は学校行事などではリミッターが外れ、

結果として目立ち、好かれる。

「断り方はめっちゃ気をつけてましたね」

告白されることも少なくなかった彼だが、

極端なほどに人との関わりを持たないように意識していたという。

人と関わりたくない自分

人と関わりたい自分

日常と行事ごとの間で揺れ続けている彼がそこにはいた。

その当時、彼を救っていたのは幼い頃から続けていたサッカーだったという。

「サッカーに行けばみんなと会える」

一つ上の人たちとずっと続けていたクラブチームのサッカーだけが彼の居場所となっていた。

仲が良く、幼馴染のような関係性ではあったが、学校での一件は話していない。

むしろ知られたくないという思いから話せなかったと当時を語る。

それでもその瞬間だけは、楽しくいられた。

けれど中学3年生になると仲の良かったメンバーは先に卒業し、

学校もサッカーもおもしろくなくなった。

それでも「辞めたい」とは言えないまま、高校もサッカーで進学を決めたという。

「同期と一緒に過ごすことが難しい」

これまで彼にとって学校とサッカーは別々の環境だったが故に、両立できていたのかも知れない。人と関わりたくないという気持ちも重なり、同学年の部員との距離感がわからなかったという彼。当手を振り返り、部内では意見交換もするが、一度授業や日常ひんじつに戻れば話さないという様はさながらビジネスのような関係だったという。

そして彼が高校を決めたことのもう一つの理由が修学旅行。

海外に修学旅行ということで選んだにも関わらず、彼の代ではサッカーの大会と重なり旅行を断念。

さらに当時付き合っていた彼女と厳しい顧問との板挟みなど、

多くのしがらみを抱えた高校生活は過ぎ、「何もかもが楽しかった」と語る専門学生時代へと移っていく。

「お酒と女に走った時期」

笑いながら語る彼から、いかにその時代が彼にとって輝いていたのかが見えてくる。

これまでのしがらみから解放され、人間関係においても元来の人懐っこさを取り戻していったという。

中でも大手焼き鳥チェーンでのアルバイト。

バイトリーダーとしてスタッフからも慕われ多くの人に囲まれている様子は今に通じるものを感じる。

一時はそのまま就職することも頭によぎるくらい楽しかったという。それでも彼が選んだのは整体。

中学でのヘルニアや高校で関わったトレーナーとの交流を経て、思い至った卒業後の進路。なりたいものを目指しながら、たくさんの人に囲まれ日々を過ごす。

今、彼が語る大切なもの・大切にしている想いはこの時すでに確かに彼の中に在るように感じる。

そこから整体師として進み始める彼に待っていたのは理想と現実のギャップだった。教科書通りのマニュアル人間だったと語る彼は現場の上司との衝突もありながらも、患者一人一人とちゃんと向き合えるところを探し、一人の師へと辿り着く。師となった院長への憧れもあり、約2年で現場責任者となった。

「自分の想いを大切にできない」

そう語る彼の口ぶりは重い。

責任者となったことで、施術中でも院内のことに対応しなければいけない。

その現実が彼を苦しめた。

目の前の人と向き合えない、向き合わせてもらえない環境。

彼は何度も訴えたという。

責任者から外してほしい。

自分の想いを伝えてなお、

その想いを受け入れてもらうことはできなかった。

想いが届かない絶望感。

けれど何より彼が抱いていたのは、患者の人たちに対する申し訳なさではないだろうか。

自分の想いを大切にできない、大切にできない環境に身を置いている自らの不甲斐なさ。

そんな優しさの葛藤の末、彼がとった行動は入水自殺だった。

一步一步、進むごとに川の水が上へ上へと上がってくる。

口元まで浸かろうかというその時、

「怖く」

恐怖のあまりそれ以上は進めなかったという。

たった3人に送った遺書のような最後のメッセージ。

それは彼の気づいてほしい、救って欲しいという願いそのものだったのかもしれない。そして、その願いを受け取った人がいた。

想いが届かない絶望の中、想いを受け取った人が彼の命を繋いだ。

まっすぐだから曲げれない

まっすぐだから曲がれない

そんな彼が今、目の前の人の体を緩めながら願うのは

「心が元気であること」

やりたいことが出来る心と身体の状態が健康。

身体は全部知っているといる。

だからこそ自分を大切にしたいし、自身も大切にしていきたいと語っている。

繋がる縁の中、今日も彼は全国を飛び回っている

目の前にいる たった一人と 真っすぐに向き合いながら